

古今六帖と赤人集

滝本典子

はじめに

古今六帖と赤人集の先後問題は曖昧模糊の現状にあり、未だ明確にされていない。これは六帖・赤人集の成立年代そのものが漠然としてゐる為であろう。両者の先後を直接に問題とした考察は未だ見当たらず、付随的に取り挙げた二・三の諸論があるのみである。

本稿では古今六帖の「赤人」歌と万葉集及び赤人集を比較対照し、仮字万葉の転化とされる赤人集の性質を考慮しながら、六帖と赤人集の先後問題を明確にしたい。両者の先後を明確にする事は、六帖に於いてその「赤人」歌の採歌資料を判然とさせ、赤人集に於いては仮字万葉から赤人集への転化の時期を設定させ得る事となる。

一

本論に入る前に触れて置かねばならぬ事柄がある。一は赤人集の性質、一は六帖作者名の信頼性である。

古今六帖と赤人集 (滝本)

まず前者から述べたい。赤人集は後藤利雄氏の「仮字万葉と見た赤人集及び柿本集一部——私家集の成立に関する考察——」(国語と第二十七卷第三号昭三十五・三)及び「赤人及び千里両集の研究」(山形大学紀要(人文科学)、第二号昭三十五・十)に到つて初めてその正体が明らかになつたと云えよう。就中

前者の研究は、赤人集及び柿本集の一部の原形が仮字万葉であり、仮字万葉から発して独立した赤人集及び柿本集として別の一書を成した事を考察せられたもので、赤人集の前身を仮字万葉と論証せられた点、赤人集研究史上劃期的なものと云える。本稿は後藤氏のこの研究に教示せられたもので、こゝで対象とするのは仮字万葉が赤人集化する際の現象である。それ故赤人集は流布本を用いる。これに就いては現存の赤人集三本(流布本・西本願寺本・類従本)に関する後藤氏の次の見解が示すであろう。

原本に最も近い形態を保つてゐるのが歌仙家集本(流布本)であり、仮字万葉が赤人集化して間もない形態を受継いだと思はれ、

西本願寺本及び類従本はその赤人集化したものに更に注記等を加へたものであることが知られる。(前掲『仮字万葉集と見た赤人集及び楠本』集一部「私家集の成立に関する考察」)
尚お、六帖は寛文版本すなわち流布本を使用し、且つ宮内庁書陵部藏本を参照する。

次に六帖作者名の信頼性に就いて。六帖作者名に就いて古く契沖の「此本に後の人のまとふ事は作者也。」(『和歌拾遺六帖』)と云う如く、藤原清輔の『袋草紙』以来の六帖杜撰説の震源地を、偏にこの作者名に対する不信に拠るものであつた。そこで、本稿が作者名に重きを置く考察である以上、こゝで対象とする作者名「赤人」が信頼し得るか否かをまず検討して置かねばならぬ。

近時発表せられた奥村恒哉先生の「古今六帖と古今集」(国語国文第三十三卷第四号照)・「後撰集と古今六帖」(国語国文、第三十五卷第十号照四十一・十五卷)は、この作者名の問題に検討を加えられ、六帖杜撰説の震源地を解明せられたものである。右の御論文は、六帖所引古今歌及び六帖所引後撰歌の作者名が従来云われて来た如き杜撰なものではなく、古い姿を保存しており、平安時代に書かれたものである事を明確にせられたものであつて、この御見解は六帖所引万葉歌、すなわち本稿の対象とする作者名「赤人」に就いても大きな示唆を与えられるものと云える。何故なら、六帖所引古今歌並びに六帖所引後撰歌の作者名が平安時代のものである以上、六帖所引万葉歌の作者名も又そうであろうと考えるのは、自然の事として納得し得るからである。尚おこの場合、六帖の作者名表記が六帖の編纂時に同時に為されたのではなく、六帖そのものゝ成立と作者名の書き込みとが別々に為されたの

ではあるまいかという事も常識的に考えられる。しかし万一そうであつたとしても、書かれた年代が平安時代のものである以上、その書き込みの年代もこれ又平安時代であり、その時代を下るものではないと判断し得る。従つて現時点で六帖所引万葉歌の作者名を扱う場合、その作者名が六帖編纂時に書かれたものであつても、又後に書き込まれたものであつても、何れにしても平安時代のもので考えて差し支えない。すなわち、作者名「赤人」は平安時代に書かれたと考えられる。

二

さて、先後問題の考察に入るわけだが、六帖に「赤人」と作者名の有る歌は十五首^①あり、凡て六帖所引万葉歌である。今これらの十五首に就いて万葉集に於ける作者名及び赤人集との関係を調査するに、第一表を得る。

この第一表には明確にそれと判別し得る二種の傾向がある。表の上欄に(A)・(B)と区別したのがそれで、(A)の場合、万葉集では作者名「赤人」であるが、それに該当する歌は赤人集に無く(九首)、一方(B)の場合、万葉集では作者不明となつているが、その該当歌は赤人集に有る(五首)。たゞ三〇九二一のみは(A)・(B)何れにも該当する故、すなわち万葉集では作者名「赤人」とあり、赤人集にも該当歌が有る故例外になる。今問題にするのはこの(A)・(B)二種の傾向であるが、まず(A)の場合、六帖作者名「赤人」は万葉集から来たかと考えて差し支えない。問題は(B)の場合である。かゝる現象のみを捉えて(B)の六帖作者名が赤人集から来たものとするのは些か速断に過ぎ

〔第一表〕

古		今		万		葉		赤	
番	号	初	句	帖	作	者	名	番	号
三二六一六		我せこに	一	赤人	八・一四二六	山部宿祢赤人	無		
三二五三六		いにしへの	三	あか人	三・三七八	山部宿祢赤人	無		
三二六九九		みさこゐる	三	あか人	三・三六三	山部宿祢赤人	無		
三二七八〇		ますらおは	三	あか人	六・一〇〇一	山部宿祢赤人	無		
三三三三七		天地の	四	山のへ 赤人	三・三一七	山部宿祢赤人	無		
三三三四八		みむろきの	四	あか人	三・三二四	山部宿祢赤人	無		
三五〇八〇		恋しくは	六	あか人	八・一四七一	山部宿祢赤人	無		
三五一九六		わかぬ浦に	六	赤人	六・九一七	山部宿祢赤人	無		
三五二二七		くたらの野の	六	赤人二首	八・一四三一	山部宿祢赤人	無		
三〇九二一		春たゝは	一	赤人	八・一四二七	山部宿祢赤人	有	一八八四八	
三〇八九二		きのふこそ	一	山のへ あか人	十・一八四三		有	一八六四一	
三〇八九九		打なひき	一	あか人	十・一八三二		有	一八六二〇	
三一一三六		春霞	一	あか人	十・一八七四		有	一八六六七	
三一一三一		春の雨に	一	あか人	十・一八七七		有	一八六六九	
三三八八八		我背子を	五	あか人 きとの女 郎とも	十・一八二二		有	一八六二七	

六帖・赤人集―流布本。万葉集―佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『万葉集』。

る。右表のみでは、逆に赤人集の方が六帖の影響を受けた結果とも考えられるからである。

ところで、この(B)の現象が赤人集が六帖に影響を与えた結果生じたものとすれば、六帖は赤人集を資料として見ている事になるのであるから、畢竟赤人集の成立は六帖成立以前という事になるであろう。従つて両者の先後問題は、この(B)の現象を吟味する事に依つて明らかにならうかと思われる。但し、その際に考慮せねばならぬ問題がある。それは作者名と本文とが同一の資料から来ているや否やの問題である。勿論両者が同一の資料から来れば問題はない。しかし別々の資料からという事も有り得る。就中今回の場合、赤人集の前身が假字万葉であり、且つ六帖所引万葉歌が約千二百首も有る事を考え合わせる時、歌の本文は直接原典の万葉集から、作者名のみ赤人集からという事も実際問題として起り得る。従つて、本稿ではこの問題を考慮しながら考察を進めて行きたい。

三

前掲第一表を見るに、(A)の歌九首に就いては三一六一六のみ第一帖に有り、他の八首は凡て第一帖以外に有る。又(B)の歌五首に就いては三三八八八のみ第五帖に有り、他の四首は凡て第一帖に有る。

この場合、三三八八八は六帖作者名に「あか人^{あか}郎^{らう}と女^{むすめ}」とあり、

作者名に異伝が有る故別扱い出来よう。すなわち(A)の場合は第一帖以外(三一六一六は例外)に有り、(B)の場合は第一帖に有ると云える。換言すれば、以上の事から(B)の歌の条件として、六帖中特に第一帖のみに分布している(その理由を考える必要があるが、こゝ

では別問題として)と云えるのではあるまいか。——考察①
次に、次一表で対象とした歌十五首に就いて、各歌の次に来る歌の出典を調査すべく、第二表を作成した。

まずこの第二表の作成要領に就いて、最初の歌で以つて説明を加えて置こう。六帖の歌の配列順序に於いて、三一六一六の次に来る歌三一六一七「としふれと色もかはらぬ松かえにかゝれる雪を花かとぞみる」は、万葉集に出典が無く、且つ、第一表で既に提示して置いた如く、この六帖三一六一六の該当歌は赤人集には無い事を示している。

さて、この第二表にあつても、前掲第一表に見たと同様の二種の大別の有る事が判る。(A)の、赤人集に該当歌が無い場合、各歌の次に来る歌は万葉歌であり、一方(B)の、赤人集に該当歌が有る場合、各歌の次に来る歌は万葉集に出典を求め得ず、従つて万葉歌でない(但し、(A)の三一六一六と三二七八〇の二首は例外。三〇九二一は第一表で例外扱いした故、こゝでも問題の歌として置く。この歌に就いては後述。)すなわち、(A)の場合と(B)の場合とは、六帖内部の歌の配列構成に、次の如き明確な書き分けの現象の有る事が知られる。所謂、万葉集より作者名を採つた場合には、その歌の次に配列する歌も万葉歌(A)、一方、赤人集より作者名を採つた場合には、その歌の次に配列する歌は万葉歌以外の歌(B)。

かゝる書き分けの意味如何。第二表の帰結として次の如く云えるのではあるまいか。

すなわち、第二表の表示せるこの現象は、六帖が赤人集を見たか、或るいはその逆かの問題に就いて、その根本に触れるものであ

〔第二表〕

		←(A)→		←(B)→		
番号	古	今	六	帖	文	
番号	番号	本	帖	万	葉集	
番号	番号	本	帖	番号	番号	
三二六一六	三二六一七	としふれと色もかはらぬ松かえにかゝれる雪を花かどそみる		有	十一・二七〇七	無
三二五三六	三二五三七	おく山の岩垣沼の水こもりに恋やわたらんあふよしをなみ		有	七・一三九六	無
三二六九九	三二七〇〇	紫のなたかのうみのなのりそのいはになひかんときまつ我は		有		無
三二七八〇	三二七八一	紀の国の吹上の浜も有物をしつみはてぬと何歎くらん		無		無
三三三四七	三三三四八	みむろの神なひ山にもゝえさししけくおひたるつぎの木のいやつ		有	三・三三四	無
		きくくの玉かつらたゆることなくありつゝもやますかよはんあす				
		かのゝふるき都は山高み河とをしろし春のひはやましみかほし秋				
		のよはかはしもきよしあざ雲にたつはみたれて夕霧にかはつはさ				
		はきみることになきのみそなくむかし思へは				
		しきしまのやまとの国に人はおほくみちてあれともふち波の思ひ		有	十三・三二四八	無
		まつはれわか草の思ひなれにし君かめをこひやあかさんこのなか				
		きよを				
		藤波のかけなる海の底清みしつむ石をも花とこそみれ		有	十九・四一九九	無
		芦田鶴のすまふ入江の白菅のしらすや君は我ごふらくを		有	十一・二七六八	無
		梅の花咲る岡へに家しあればともしくもあらず鶯の声		有	十・一八二〇	無
		行てみぬ人もしのへと春のゝのかたみにつめるわかな也けり		無		有
		きのふより後をはしらす百年の春の始はけふにそ有ける				
		春霞立よらねはやみよしのゝ山に今さへ雪のふるらむ				
		夕月夜おほろに人を見てしより雨雲はれぬちこそすれ				
		ひさかたの雨にぬれしをあまつこといつみのこやに我ねし夜はも				
		まてとははゝまた夜はふかし長月の有明の月そ人はまとはす				

古今六帖と赤人集 (瀧本)

ろう。何故なら、六帖内部に於ける書き分けは、飽く迄も六帖のみに係わる問題であり、畢竟六帖編者の編纂意識という事に他ならぬいからである。つまり六帖内部に於けるこの書き分けは、六帖が赤人集を見て、作者名を赤人集から採つた場合に於いてのみ起こり得る現象と考えられる。もし逆に、六帖が赤人集に影響を及ぼしたものであるとすれば、六帖編者の赤人集に対する意識的な配慮は為されない故、六帖側にかゝる現象は生じないと考えられる。されば、この書き分けの現象は、六帖編者が作者名表記にあつて資料を使い分けた結果に他ならず、(B)の歌は万葉集にも出所の有る歌故、作者名を赤人集から採り入れた事を明示する為になされたものと考えられるのである。同時にこの事は、六帖編者の資料に対する厳密性を表示せるものとも云えよう。

ところで、こゝで注意せねばならぬ事は、先に触れて置いた、作者名の後からの書き込みの問題である。もし作者名表記が六帖成立後に別に為されたものであるとしたら、この六帖作者名「赤人」を、赤人集と対照させる方法に依る両者の先後問題決定は意味を持たなくなる。何故なら、赤人集を見て六帖の作者名を後から書き込む場合、書き込み者に於いては六帖と赤人集は同時点で扱われ、それ故両者の成立の先後は、問題外として無視されてしまう恐れがあるからである。そこで、六帖作者名の後からの書き込みという場合を考慮しなければならぬ。

かゝる場合を想定して考えてみよう。六帖作者名「赤人」を赤人集を見て後から書き込む場合、書き込み者は六帖の歌の中、まず(A)赤人集に入集している歌で、しかも(B)その歌の次に来る歌が万葉歌

でない、かゝる二つの条件を満足せしめる歌を捜さねばならぬ。六帖総歌数約四千五百首の中からかゝる歌を抽出する作業は並大抵の事ではなからう。従つてこの作業終了後、作業の膨大さ故に、抽出せる、すなわち右の条件を満足せる歌全部に「赤人」と書くであろう事は、常識として考えられる。一方逆に云うと、かゝる作業を経た後で「赤人」と書いたり書かなかつたりする事は到底常識では考えられない。更に斯く書いたり書かなかつたりする現象が、第一帖と第一帖以外という明確な形態を取つているのならともかく、勿論このような区別は見られないし、且つ、問題の第一帖だけでも右の二つの条件を満足させる歌は十三首⁽⁹⁾(この中四首は前掲(B)の歌)ある。従つてこれらの事項を考慮する時、作者名「赤人」が六帖成立後に赤人集を見て書き込まれたとは到底考えられず、されば、本稿で対象とする作者名「赤人」は、六帖編纂時に同時に書かれたものと考へて差し支えない。

以上の考察により第二表の提示せる書き分けの現象は、六帖編纂時に六帖が赤人集を見て、(B)の歌の作者名を赤人集から採り入れたものである事を明確にし得たのである。——考察⁽⁹⁾

すなわち、こゝに及んで両者の先後問題は、六帖が赤人集を資料として用いている故、赤人集の成立は六帖よりも先という大方の予想が立つたわけである。そしてこの予想は第一表で例外扱いし、第二表で問題の歌とした三〇九二一に関する次の考察を以つて確實にされる。

三〇九二一は第一表で例外扱いしたが、こゝに到つてこの歌が(A)・(B)何れに所属するか明確にされたと思う。この歌が、(1)第一帖

に有り(考察①)、且つ(2)この歌の次に来る歌が万葉歌でない(考察②)。かゝる二つの条件を満足せるにより、この三〇九二一は(B)の方に所属する、すなわちこの歌の作者名は万葉集に拠らず赤人集に拠つたものと考えられる。——考察③

そしてこの考察③の結果と、次に掲載する赤人集に関する後藤利雄氏の見解とを照合する時、六帖と赤人集の先後問題は明白になる。

後藤氏の前掲「仮字万葉と見た赤人集及び柿本集一部——私家集の成立に関する考察——」中関係部分を引くと、この三〇九二一に就いて(他の一首も含めて)

今230及び231(三〇九二一の事)の二首に就いてその位置を見ると、これは前に訓み解いた部分と後に添加したと考へられる部分との間に存する事を知る。而して原形と考へられる仮名書の万葉集に於ては、添加の部分を示す為に、一葉か半葉かの余白を残すことは自然なことである。それが赤人集化した後ではさういつた余白は何等の意味を有せぬものとなるのであつて、従つてそこを赤人の歌でもつて填充することも又自然の事である。

と述べておられる。この論文の概要は既に触れて置いた如く、赤人集・柿本集一部の原形が仮字万葉であつたとされ、その成立過程を考察せられたものであるが、筆者が関係有りとして先に引いた部分は、後藤氏の云われる仮字万葉から赤人集化への論拠の一である。すなわち氏がこの引用文の前後で、

先づこのものを仮字万葉の転化と見る際、数首ではあるが赤人集の歌が存する事を如何に解釈するかに就いて述べたいと思ふ。

……中略……右の推察により数首の赤人の歌が挿入されてゐることとは却つて赤人集が仮字万葉であつたといふ推定を助けることになるのである。

と述べておられる如く、この三〇九二一を含む数首の添加を以つて仮字万葉から赤人集への転化の論拠とされる。

先に掲げた考察③の結果と右の氏の見解とを照合すると、次の如く云えるであらう。三〇九二一の作者名が赤人集に拠つたという事は、三〇九二一の該当歌が赤人集に既に在つた事を示す。この三〇九二一の該当歌が赤人集に在るといふ事は、後藤氏の曰く、仮字万葉が赤人集化した後の体裁なのである。それを六帖が見ている事になるのであるから、赤人集化は六帖成立以前に必ずや為されていなければならぬという事である。

すなわち、こゝに到つて六帖と赤人集の先後問題に就いては「仮字万葉——赤人集——六帖」の成立過程が考えられ、私家集としての赤人集の成立は六帖成立以前であつたと結論し得る。

四

以上で六帖と赤人集の先後問題は明確にされたが、今までの考察が作者名を中心とせるもの故、次には作者名以外の方法で以上の考察結果を確かめる必要がある。されば、(B)の歌(三〇九二一も金)の作者名資料が赤人集である事が判明した今、その本文も又赤人集からという事は自然に考えられる。そこで本節では、(B)の歌を対象とする万葉集・赤人集・六帖三者の本文を比較する事に依つて、私見を確かめたい。

ところで、赤人集の前身が仮字万葉である故、原則として両者(万葉集と赤人集)の本文は一致するだろう。従つて六帖が万葉集・赤人集何れに拠つたとしても、まず原則として現われるのは、万葉集・赤人集・六帖三者の本文一致の現象と思われる。しかしながら今回の場合、かくの如き三者の本文に一致を見る歌は判定規準になり得ない。なんとなら、かゝる歌では六帖のその本文が万葉集・赤人集何れに拠つたものか判別不可能だからである。そこで今回の対象となる歌は三者に本文異同の認められる歌である。つまり、三者の本文異同に於いて、六帖・赤人集対万葉集という異同の対立形態が認められるなら、六帖が赤人集を資料としたとする私見は本文の面からその妥当性を確かめられるわけである。

- 1
- 万葉集 十・一八四三
 - 赤人集 一八六四一
 - 六帖 三〇八九二
- 2
- 万葉集 十・一八七七
 - 赤人集 一八六六九
 - 六帖 三一三三一

昨日社年者極之寶春霞春日山爾きのふこそとしはくれしかはるかすみかすかのやまに
 速爾来(元・類)
 昨日こそ年は暮れしか春霞春日の山きのふこそ年はくれしか
 に早立ちにけり(流)
 きふこそ年はくれしか春霞かすかの山にはや立にけり(流)

春の雨はるのあめにありけるものをたちかくれいもかいへん
 春の雨はるのあめ爾有来物乎立隠妹之家道このひぐらしの
 爾此日晚都(類)
 春の雨はるのあめにありける物を立隠れ妹が家路に此の日暮しつ(流)
 春の雨はるのあめに有ける物を立かくれ妹が家路に此日暮しつ(流)

右の二首に就いては三者の本文が一致する故問題はない。問題になるのは歌句に異同の有る次の四首である。

- 3
- 万葉集 八・一四二七
 - 赤人集 一八八四八
 - 六帖 三〇九二一
- 4
- 万葉集 十・一八七四
 - 赤人集 一八六六七
 - 六帖 三二二三六

春立あすからはは若菜摘むと占し野に昨日も今日も雪は降つ(流)
 春立あすからははわかまつまんとしめしのにきふもゆきはふりつ(流)
 今日毛雪波布利管(類)
 春たはわかまつまんとしめしのにきふもゆきはふりつ(流)

春霞はるかすみたなびく今日の夕月夜きよく照るあすからはむ高圓の山(流)
 照良武高松之野爾(類)
 春霞はるかすみたなびく今日の夕月夜清くてらんたかまとの野に(流)

この場合、異同が有るのは第二句と第五句である。まず第二句から説明する。第二句は万葉集「田菜引今日之」、赤人集「たなびく今日の」、六帖「たなひく山の」となつており、こゝでの異同形態は六帖対赤人集・万葉集である。処理如何。かゝる異同はこのまゝでは(六帖・赤人集共に流布本のみを見ていたのでは)解決しない。

これは六帖諸本と赤人集諸本を使用する事に依つて解決する。すなわち六帖流布本の傍注に「たなひくけふの」とあるを考慮すれば、第二句の異同形態は三者の本文一致という事になり、問題は八原則Vで解決する。次に第五句に就いて。第五句は万葉集「高松之野爾」、赤人集「高圓の山」、六帖「たかまとの野に」とあり、このまゝでは三者の本文は凡て別々である。しかしこれも諸本を比較する事に依つて解決する。すなわち、六帖流布本の傍注に「たかまとの山」とあるに拠つて本文異同は六帖・赤人集対万葉集の対立形態となり、問題は解決する。

5

一 万葉集 十・一八三二
 吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚変瀬
 夜之不深明爾 (元・類)
 類「刀」ヲ「カ」。

二 赤人集 一八六二七
 我兄子をならしの山の喚子鳥君呼返
 せ夜の更けぬ間に (流)

三 六帖 三三八八八
 我背子をならしの山の呼子鳥君よひ
 かへせ夜の更ぬとき (流)

こゝで異同の見られるのは第二句と第五句である。まず第二句から。第二句は万葉集「莫越山能」、赤人集「ならしの山の」、六帖「ならしの山の」であるが、これは六帖・赤人集対万葉集の対立である故、流布本のまゝで解決する。次に第五句に就いて。第五句は万葉集「夜之不深刀(カ)爾」、赤人集「夜の更けぬ間に」、六帖「夜の更ぬとき」で三者の本文は凡て異なる。しかしこれも又諸本の比較で解決する。すなわち赤人集西本願寺(以下西本願)に「よのふけぬとき」があるに拠つてその対立は六帖・赤人集対万葉集と

なり、問題は解決する。

6

一 万葉集 十・一八三二
 打靡春去来者然為蟹天雲霧
 相雪者零管 (元・類)
 打靡春去来者然為蟹天雲霧
 合て雪は降つ、(流)

二 赤人集 一八六二〇
 打なひき春さりくれどしかすがに空曇
 雲きりあひ雪はふりつ、(流)

三 六帖 三〇八九九
 以上1から6まで (元) | 元曆校本万葉集、(類) | 類聚古集、(流) 流布本。

問題が有るのはこの歌である。異同箇所は第二句と第四句であるが、第二句の場合、万葉集「春去来者」、赤人集「春さりくれど」六帖「春さりくらし」であり三者別々である。さて、3から5までの歌にあつては三者の本文が一致しない場合、各諸本の比較照合で解決した。然るにこの第二句の場合はそれでは解決しない。すなわち、六帖流布本・標注本・校証本の三本には「春さりくらし」、桂宮本・宮内庁一本の二本には「春さめくらし」とあり、一方赤人集流布本には「春さりくれど」、西本願寺本には「はるはりくれで」、群書類従本(以下類従)には「春さりくれは」とあり、諸本の比較上からでは三者の本文一致も見なければ、今までの如き六帖・赤人集対万葉集の異同形態も窺えない。第四句も第二句と同じ事が云えるのであつて、六帖に於いては流布本・桂宮本・宮内庁一本・標注本・校証本凡て「雨雲きりあひ」となつており、一方赤人集にあつては流布本「空曇合て」、西本願寺本・類従本「そらくもりあひ」とあり、万葉集は「天雲霧相」であつて、諸本の比較照合を

試みても第二句同様、三者の本文一致や六帖・赤人集対万葉集の対立関係は見出せない。然るに6の歌は問題の歌という事になろう。

さて、今までの個々の用例の結果をまとめるに、3・4・5に就いてはA原則Vで解決するものを除く凡ての本文異同が、六帖・赤人集対万葉集の対立関係で解決された。すなわち六帖の本文が赤人集に拠っている事が明らかにされた。しかしこの結果は、1・2の歌にもその示唆を及ぼす事が出来ようと考えられる。3・4・5で六帖・赤人集対万葉集という対立関係が現われている以上、三者の本文一致を見るこれらの本文に就いても、六帖は赤人集に拠つたと考える方が自然なものであるからである。尚お6の歌が問題として残つているのであるが、六首中五首までが以上の考え方で解決し得る事、更には各諸本の伝写の誤り、或るいは例の万葉伝承歌の問題等を考慮すれば、問題は無くなると考えるのが穏やかであろう。

以上の考察より、(B)の歌は赤人集を採歌資料として用いている。すなわち、赤人集の成立を六帖の成立以前とする私見は本文の面からもその確実性が確かめられたわけである。

おわりに

以上を要するに、古今六帖と赤人集の先後問題に関して、私家集としての赤人集の成立は六帖成立以前であり、且つ六帖は作者名・本文共に赤人集を資料として用いている事を明確にし得た。されば六帖の「赤人」歌は、その出所を万葉集・赤人集何れかに拠つている事となり、改めて六帖作者名及びその本文の信頼性に驚かざるを

得ない。更に、六帖資料としての赤人集は、六帖所引万葉歌の資料の問題に発展する。この問題に就いての考察は後日に譲りたい。

補注

① 「赤人」作者名に就いて六帖諸本の異同を調査するに、流布本・宮内庁書陵部蔵桂宮本(以下桂宮本)・宮内庁書陵部蔵一本(以下宮内庁本)・山本明清『古今和歌六帖標注』(以下標注)・石塚龍麿『校証古今歌六帖』(以下校証)の凡てに異同の無いのが、この十五首である。この場合三五二二八のみ異同が有る。すなわち標注本には赤人作となつていないので、この歌は本稿では対象としなかつた。

② 六帖番号三〇八九九・三〇八九二・三〇八九六・三〇九五九・三二〇一二・三一〇二五・三一〇四九・三一〇六一・三二二三六・三二二五五・三二二三一・三二二九八・三二五〇四(印は(B)の歌)。

昭和四三・五・二〇稿了

執筆 者 紹 介

重松 信弘	皇学館大学教授
三木 正太郎	皇学館大学教授
田辺 裕	皇学館高等学校教諭
滝本 典子	皇学館大学大学院学生